

パネル

という科学的研究結果への接点を見出すことが可能となる。つまり宗教は、精神的あるいはスピリチュアルな次元を介して、心身に影響を与える。これは、宗教的救いが身体的救い(healing)を無視できないことを示す。スピリチュアルな次元の根拠はイマゴ・デイという概念に基づく。

③救いにおける健康や身体的位置 「救済」は宗教と医学の実現すべき同じ目標であり、両者の関係が本来非常に密接であることがわかる。テイリツヒは、「イエスは、何はさておき癒しを行う者である」、「イエスにおいて、宗教的なものと医学的なものとの一致を最も鮮明に示している」と指摘する。医学研究が、宗教と健康の問題を明らかにしつつある現在、キリスト教は救済の文脈の中で肉体の救済がどのような意味を持つのか、心身の健康の問題はどのように議論され、位置づけられるのかを明らかにする必要がある。

パネルの主旨とまとめ

芦名定道

キリスト教思想は、ポスト近代の思想的状況下において、多様な動向を示している。その中で、とくに顕著なものの一つが、「キリスト教と自然科学」をめぐる議論であり、とくに欧米のキリスト教研究において言えば、マクグラス、クレイトン、カブ、マクフェイグなど英語圏の神学者からパネンベル

ク、モルトマンらのドイツ語圏の神学者まで、その広がりにはキリスト教思想の広範な領域に及んでいる。これは、キリスト教思想で、伝統的に「自然神学」と呼ばれる思想領域に関わる問題であるが、伝統的で古典的な自然神学を踏まえつつも、現在のポスト近代の知的状況に即した自然神学の再構築が世界的広がりにおいて求められているということを意味している。実際、一九世紀～二一世紀にかけて、自然神学の問題領域は、天文学や物理学から、生命科学(進化論を含む)、心理学、そして脳神経科学へと大きく拡張し、その学的基础の再検討なしには、今後のキリスト教思想の積極的な展開は期待できない。また、こうしたキリスト教思想が直面しつつある問題状況(科学技術時代の宗教という事態)は、二一世紀の宗教思想研究全般にとっても、共有可能な、また避けて通れないものと思われる。

本パネルは、以上の問題状況を前提に企画された。各パネルにはそれぞれ独自の視点から発表いただいたが、パネル全体としては、日本におけるキリスト教思想研究の新たな可能性を展望することが目指された。まず濱崎雅孝氏には、「科学と神学の対話」をめぐる現代キリスト教神学の問題状況を確認した上でパネル全体の議論の方向付けをお願いし、続く落合仁司氏には、キリスト教思想と科学の関わりを論じる際に、その基礎となる「数学」の役割について議論いただいた。こうした理論的基礎論に対して、金承哲氏には、生命科学(とくにクロールン技術など)の進展がキリスト教神学にいかなる問いを突きつけているのか、杉岡良彦氏には、現代医学の問題状況で、宗教

の問題を論じる意義はどこにあるのかといった視点から発表いただき、「宗教と科学」という問題圏が有する実践的な射程の明確化が試みられた。最後にコメンテータの今井尚生氏には、個々の論点についてのコメントとともに、キリスト教神学と現代物理学という専門領域から、発表全体に対して論評いただいた。

以上の発表とコメント、そしてフロアとの質疑応答を通じて、「宗教と科学」の問題圏から見たキリスト教思想の新しい可能性について包括的かつ具体的な議論がなされるとともに、次のような問題点や今後の課題が明らかになった。

まず、キリスト教思想の側に現代科学との対話が求められていることは理解できるとしても、科学の側において、宗教・神学と対話する意義はどこに認めうるのかについては、論点を整理し問題の所在が明らかにされねばならない。とくに現代日本の学的状況下で、宗教との関わりを積極的に考えている科学者や医者は少数者であり、むしろ、科学的説明に問題を還元する傾向（事柄の説明や理解において宗教が何らかの役割を果たすことへの懐疑論・否定論）が顕著である。このことは、日本において「宗教と科学」の関係性が問題として共有され難い原因の一端をなしている。しかし同時に、こうした近現代日本の知的状況がそれ自体問題であることも指摘されねばならない。また、神、人間、自然といった伝統的な階層的区分・境界線が揺らいでいる現代の状況については、それを世俗化過程の中に位置づけ、そこから伝統的なキリスト教神学の変革を論じることも可能であるが、空間的境界線と合わせて主観客観という議

論の枠組み自体も再考を要する。さらに、現代数学が切り開いた議論の地平（神について語る隠喩として数学は従来矛盾として処理されてきた問題を新たに論じることを可能にしている）も、現代の宗教思想との接点を明確化するとともに、再度キリスト教思想史の伝統的議論の中に位置づけられる必要がある。